

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.26 No.2 February 2025

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



2

CONTENTS

・巻頭言

お墓地（教祖の墓地）の意義
／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」（17）

明治 22 年 5 月～6 月
／深谷 耕治 2

・英語文献にみる天理教（8）

D.C. グリーンの『Tenrikyō』（4）
／尾上 貴行 3

・音のちから—中国古代の人と音楽（24）

文物が語る音の世界—五絃琵琶—
／中 純子 4

・ブラジルの宗教的風景（3）

ブラジルの宗教と移民③
／中西 光一 5

・2024 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（10）

第 5 講：85「子供には重荷」
／森 洋明 6

・おやさと研究所ニュース 7

第 373 回研究報告会（12 月 20 日）
／2024 年度公開教学講座のご案内／
2024 年度おやさと研究所 特別講座
「教学と現代」／2025 年度公開教学
講座のご案内

巻頭言

お墓地（教祖の墓地）の意義

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

朝、修養科生の一団が北大路の歩道を東
に向かって歩いて行く姿を見かけることが
ある。同じ信者詰所から修養科の朝礼に向か
う集団で、数名がぱらぱらと緩く固まって修
養科に向かっている。昔は一団の人数も多く、
2 列に列を作って歩いていたように思う。私
も 1 度目の修養科の時に、ある教会の信者詰
所から、先頭に修養科の組係、続いて年配者、
後方に若者といった順番で、小学生の登校よ
ろしく列を作ってその歩道を歩いて修養科
の朝礼に向かっていた。今は、北大路ルート
で修養科に向かう集団の規模も小さくなり、
その数も少なくなったようだ。

列を作って修養科に向かう彼らをまだ数
多く見かけていた頃、少し目に留まる光景が
あった。北大路の歩道を歩く修養科生が、左
手に畑や田んぼが見え、その向こうに豊田山
を眺められるところまで来ると、リーダーの
号令で立ち止まり、北を向いて豊田山のお墓
地（教祖の墓地）に向かって遙拝をするので
ある。全ての修養科生の集団がそうするわけ
ではなかったが、遙拝する集団をちらほらと
見かけていたように思う。彼らの立っている
場所から教祖の墓地までは 700 メートルは
あるだろうか。一方、彼らの背後にある教祖
殿は 150 メートルも離れていまい。存命の
教祖にお尻を向けて豊田山の墓地を遙拝し
ていることになる。教祖の墓地を遠く拝する
修養科生の姿を見るにつけ、教祖が背後から
「私はこちらにいるで」と声を掛けているの
ではないかしらんとしたりしたものだ。

教祖の墓地は、明治 20（1887）年当初、
中山家の菩提寺であった善福寺境内にあっ
た。しかし、それは一時的な埋葬で、明治
25 年 12 月に豊田山に新墓地が竣工する。
12 月 13 日に執行された改葬祭の参列者は
10 数万人であったという。それ以降、教祖
の墓地は参り所として多くの信者が足を運ぶ
場所になった。一方、教祖殿の歴史を紐解い
てみると、教祖 10 年祭を翌年に控えた明治

28 年 11 月 14 日に教祖殿普請を押して願っ
たところ、「仮家」なら良いというお許しが
出て、12 月 2 日に教祖殿仮殿が建てられた。
これはおそらくご休息所を改装して設えたも
のと思われる。当時は、教堂の中に神殿（神
床と甘露台）と祖霊殿（旧・北の上段の間）
があり、祖霊殿の裏に隣接して教祖殿（旧・
ご休息所）があった。当時の図面を見ると教
祖殿には上段は設置されていないようなの
で、教祖の住居としての性格が強かったのだ
はなからうか。その代わり、教祖の墓地が参
り所として機能していたと考えられる。

教祖殿が別棟として建つのは大正普請の
時である。大正 3 年 4 月に教祖殿（現在の
祖霊殿の建物）が落成し、神殿北礼拝場と
廊下で繋がられた（廊下の途中に神饌所と
祖霊殿があった）。図面を見ると教祖殿の隣
にご休息所が設けられているので、教祖の
お出まし・お下がりにはあったのかもしれな
い。その後、昭和 8 年 10 月に現在の教祖殿
が落成し（昭和普請）、お給仕、お風呂、お
化粧など、教祖へのお仕えが始まった。

大正、昭和の普請を経て、教祖殿は教祖の
住居としてだけでなく、参り所としても充分
に機能するようになった。だが、その後もお
墓地に参る信者が多かったのはなぜだろう。
かつては、教祖の墓地に参るだけでなく、墓
前で十二下りのおどりをする人もいた。昭和
の末、教祖 100 年祭頃までは、教祖の墓
地は参り所としての吸引力があったのだ。墓
地とは本来、故人を偲び、一族の紐帯を確認
する場所である。教祖の墓地もこの墓地信仰
の慣習の中で捉えられていたとすれば、教祖
殿に存命の教祖がいらっしゃると分かっ
ても、信者の足は自ずとお墓地にも向かった
のだろう。しかし、この 20 数年来、教祖の
墓地に参る人は減っているように思う。日本
人の墓地信仰が衰退してきていることを考え
ると、参り所としてのお墓地の意義、その力
学に変化が起きているのかもしれない。

明治 22 年 5 月～6 月

天理大学人文学部講師

深谷 耕治 Koji Fukaya

明治 22 年 1 月 15 日、「おさしづ」により兵神分教会が設立され（3 月 13 日地方庁認可）開筵式は 6 月 2 日に行われた。今回は、開筵式前後の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・明治 22 年 5 月 20 日：増野正兵衛神戸へ帰る御許し願
- ・5 月 25 日（陰暦 4 月 26 日）：兵神分教会所新築落成に付区役所へ届済、この段御礼申上げ、就ては開講式の儀は陰暦五月五日六日両日御許し願／押して日の処陰暦五月五日、六日の願／分教会所めどうの処、赤衣は又一日の日があると、郡山分教会のおさしづに御聞かせ下され、よって御鏡をめどうと致し居ります。御心をうつし下されますのに、おちばへ持ち帰り、本席へ御願ひ致して宜しきや、世界の事情で御うつし下されますや伺／御勤御面の処は郡山分教会所より伺の節に、御許し無之旨承り恐入ります。就ては悪しき払、一寸咄、甘露台、十二下りよろづよ、この御勤さして貰いまして御許し下されますや伺／御勤の人衆は男は黒紋付袴、女は紅色の衣服に白かり絹を掛け、赤袴、髪は下げ髪にしても宜しく御座りますや、おちばの型通りして宜しきや、御許し願／十二下り御勤は六人一勤、三人一勤という事承り、講社の人数も多人数でありますが、六人の処九人、九人の処十二人位として、理が外れるものでありますか願／開講式に付、参詣人に御酒御鏡餅一寸印だけさして貰いまして宜しや、人間心で先見えぬ故伺／遠方講社より分教会所へ寄進なし下されし人に、受取証書出して宜しきや伺／同日、兵神分教会所新築落成に付、本席を一度招待仕り度く御出張御許し願
- ・5 月 26 日：増野正兵衛前さしづより前の障り伺（五月二十二日左の頭のぼせ耳が鳴り、二十三日夜俄に胸先へ厳しく迫り二十四日宜しく、二十六日右の手先の痛みにつき伺）／同日、増野正兵衛身上障り伺
- ・5 月 27 日（陰暦 4 月 28 日）：兵神分教会所開講式に付、御出張御許し下さるよう前以て願
- ・同日：清水与之助身上障り伺
- ・同日：増野正兵衛婦神の事御許し願
- ・5 月 30 日（陰暦 5 月 1 日）：兵神分教会おさしづに、元々ちば一つつとめ六名のおさしづの趣、周旋方一同へ談じ、一日の日開講式六名へ談示し、後々定め方に付願／清水与之助寄留籍か本籍かを以て分教会へ入込んで宜しや伺／前川菊太郎出張御許し願
- ・同日：兵神分教会所へ清水与之助引移り願
- ・6 月 1 日：中山会長兵神分教会開講式に出張御許し願
- ・同日：松村吉太郎兵神分教会開講式に付出張の暇願
- ・6 月 15 日（陰暦 5 月 17 日）：兵神分教会所開講式御礼申上げ、後々順序の儀、清水与之助、増野正兵衛、岩崎新兵衛の三名より総代にて願、講社一同協議では毎月三度説教、中山会長よりは、警察署の内達の廉も有之に付、毎月六度、どちらを御許し下されますや伺／そうなれば月の三日、十三日、二十三日の三日御許し願／毎月陰暦二十三日月次祭御許し願
- ・同日：兵神分教会新築並に開講式等結構に相済み、信徒寄付金余りありますによって、後の日々入費に借家二軒建る事御許し願／同普請並に井戸の御許し願

・同日：増野正兵衛前々おさしづ御聞かせ下されし処、毎々帰りまして恐れ入りますが、分教会の処談示もあります付、帰る事御許し願

まず、5 月 25 日の「おさしづ」では、兵神分教会の開筵式に関する具体的な事柄が尋ねられている。日柄については、まず「さあへ／やれへ」の日、ちば治まった」と述べられて、みんなの心が定めた日として「何時なりと吉き日を以て心置き無う」と許されている。また、お目標様については「心、心がめどやで」と諭され、おつとめの形式については「鳴物一切許す。日々に勤め居る通り許し置こう」と述べられている。

おつとめ奉仕者の服装については「さあへ／どんな事して悪いとは言わん。元一つ世界その理に計り出せ」と「元一つの理」について説かれている。人数が多いことから 6 人で勤めるところを 9 人や 12 人にして良いか何うと「六だ一つ理、それより理を始める」と「六」の意味合いについて諭されている。そして、参拝者に対して酒や餅を振る舞ってもよいか何うと「随分の理を以てする」や「随分々々長くの理をするがよい」という言葉があり、分相応に長く続かたを説かれていと解される。遠方の人が寄付金を送ってきたことに受取書を出してよいか何うと「さあへ／そら心だけへ」と述べられ、本席の出張を願うと「一度席許そう」と許されている。

正兵衛は 3 日前の 22 日から身上患いが続いており（頭のぼせ、耳鳴り、胸先迫り、右の手先の痛み）26 日に伺っている。「ようへ／夜にへ／理が無くば暗くて通れん」と「夜の理」について述べられ、さらに「成る一時というは一時成る理、今尋ねる処の事情は運ぶへ」と一時的ではない「運び」について諭されている。また、27 日、本席の出張について改めて何うと「一日の日、朝の理があれば、真実理を以て尋ねるなら、出にやならんと思えば十分の理」と「朝の理」について述べられている。同日、清水与之助の身上障りについて何うと、「世界ようへ／夜から始まる」や「夜々処通り難くい。世界という、前々古き論聞かしてある」と述べられている。30 日には、前の「おさしづ」をもとに 6 名でおつとめをすることを談じた上で何うと「初まりの理を始め掛け」と仰せられつつも、「日々寄り来る道の理を見て、応法一日の日の処、すっきり委せ置こうへ」とも述べられている。

このように「正兵衛の身上」「兵神分教会への本席の出張」「おつとめの人数」と一見異なる話題の中に「夜」や「朝」の言葉がそれぞれ登場しており、同じ意味合いを伝えているようにも思われる。すなわち、泥海から道具をそろえて人間を創造してきた親神の苦勞、誰もついて来る者のいなかった中から道をはじめた教祖の苦勞、そうした親の苦勞の上に今日が成り立っていることへの自覚が促されているのではないだろうか。

6 月 15 日、開筵式を無事に勤めたお礼と共に今後説教日を毎月三度設けることを何うと「定めて三日、それでよい」と仰せられ、また押して月次祭の日が 23 日で良いか何うと「さあへ／三日の理を以て治め方、いつへ／までやで。三日の理を治め掛け」と「三日の理」について諭されている。この「三日」も元の理に基づくものであろう。

同日、正兵衛は神戸に戻ることを伺っているが、割書きを読むと、おちばを離れることについて正兵衛が重く受け止めている様子が伺える。「心通りに許して置こう」と仰せられている。

D.C. グリーンの『Tenrikyō』（4）

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

今回は、前回（本誌 12 月号）に引き続き、1895 年 5 月 22 日に日本アジア協会の例会で行われた D.C. グリーン氏による天理教論文についての発表に関して、『The Japan Weekly Mail』の 1895 年 6 月 1 日号に掲載された記事の後半の内容について見ていきたい。以下はその抄訳である。

グリーン氏は、天理教の道徳的な面について、次のように説明した。同氏の分析によれば、天理教は道徳的運動である。オミキの教えが到達した倫理的レベルは高いとは言えないが、その教えは人々がよりよい人間になることを目指すものであり、信者たちは彼女の足跡を辿っている。天理教が、その非道徳的行為に対してしばしば激しく非難されているのは確かである。また、道徳的に問題があると考えられる側面があることは否めないだろう。しかし天理教に反対する者たちのなかでも同様な点は見受けられるのであり、現在の天理教の規範と実践はこの種の批判を受けるものではない。天理教の初期においては、男性と女性と一緒に踊ることが行われていたかもしれないが、今ではそのようなことはないのである。

次にグリーン氏は、天理教におけるキリスト教の影響について述べた。オミキがキリスト教から意識的に何かを得たということはないが、ザビエルやその後継者たちの教えの影響は、おそらく天理教だけでなく黒住教や他の一派にも見られるだろう。日本の宗教史についてさらに研究が進められるまでは、この質問に対して明確に答えることはできないが、天理教の信者は教えを説く際にキリスト教の教えを借用しており、なかには聖書を学んでいるものがあることは明らかである。

続いてグリーン氏は、天理教の信仰活動、布教活動、教会組織について説明した。天理教会での礼拝の根底にある教義理論によれば、親である神が最も喜ぶのは子供の幸せな様子を見ることである。したがって、陽気で幸せな心を表現することが一番心のこもった礼拝となる。祈りの内容そのものが重要ではないわけではないが、礼拝において踊りと音楽は非常に特徴的なものとなっている。説教は、天理教教会での活動の大きな部分を占めている。これは天理教の教えを伝えていくための主要な方法となっており、教会だけでなくさまざまな場所で行われている。

また天理教では信仰治療が強調されている。目覚ましい成果が現れており、この点に関しては疑う余地はない。神の恩寵を受けるための一つの手段として金銭的な施しが行われることもあるが、これが天理教の急速な成長の主な要因となっているわけではない。その急激な発展の理由は、信仰治療に対する一般の人々の信仰にあるといえる。その背景には、伝統的な宗教教団に対する不信感、あるいは関心の喪失があると推測される。新しい指導者を求めている人びとは、天理教の説教者たちの熱意と目に見える奇跡的な力に精神的権威の証拠を見いだしている。

天理教の最高権威者は三島村の管長である。しかし、主要都市には分教会と呼ばれる信徒集団を統括する分教会長が存在し、より小さい信徒集団である支教会に対しての監督権をもつ

ている。また各支教会にもそれぞれ長がいる。東京には 2 つの分教会とおそらく 15 カ所の支教会がある。説教者は分教会や支教会の会長の推薦を受け、管長によって任命される。説教者の数は非常に多く、おそらく東京だけで 100 名以上いるだろう。管長は別として、これらの教会長や説教者たちはいかなる報酬も受けておらず、教会の運営はすべて自発的な労働によって行われている。

最後にグリーン氏は、天理教の前途について次のように述べて報告を締めくくった。この天理教の成長はまだ頂点へ達していない。しかし、教義や信仰における合理化の傾向はすでに明らかであり、教えの超自然的な側面における信仰が早晚弱められ、組織は衰退へと向かっていくであろう。この教団がたといかに短命であったとしても研究に値することは間違いないが、日本の宗教史において一つの章を占める存在にまでなるかどうかはまだわからないのである。

この『The Japan Weekly Mail』1895 年 6 月 1 日号の記事には、グリーン氏の発表が終わり、例会の議長が協会を代表してグリーン氏に特別の感謝の意を述べ、しばらく活発な質疑応答が行われた後、午後 5 時半に例会が終了した、とある。また当時、日本の宗教に関する論文を執筆する際に必要な資料を得ることは決して簡単なことではなく、この天理教に関する研究論文がいかに困難な状況下で執筆されたかを想像するに難くない、と結んでいる。

以上、グリーン氏の論文『Tenrikyō; or The Teaching of the Heavenly Reason』（天理教一天の理の教え）が『日本アジア協会紀要』1895 年 12 月号で発表される半年以上前に、日本アジア協会の会合でグリーン氏が天理教について報告した内容について見てきた。また同氏は、当時ニューヨークで発行されていた週刊誌『The Outlook: A Family Paper』でも天理教について言及している。同誌 1896 年 1 月 25 日号への寄稿「The Religious Outlook in Japan」のなかで、明治維新を経た日本の存在感が国際社会において徐々に明らかになってくるにつれて、欧米社会では日本の軍事や経済のみならず社会や文化にも関心が寄せられるようになり、日本の宗教事情を知ることが意義がある、と述べている。そして、伝道宗教の神道や仏教について紹介したうえで、日本におけるキリスト教伝道の歴史と現況について概説している。さらに、現在さまざまな教派神道が現れてきているが、この根底にはキリスト教系の新宗教であるクリスチャン・サイエンスと同様の現象があるのではないかと分析。その代表格として唯一天理教の名前を挙げ、天理教には一神教という側面がみられ、また一般民衆に広く受け入れられていると紹介している。しかし、大衆への迎合や教義の合理化により早晚その魅力が失われていくであろうとの予想を記している。グリーン氏は、その他の日本の倫理や思想についても言及しているが、このように当時の日本の宗教事情を概説するなかで、仏教、神道、そしてキリスト教とともに、特に天理教の名前を挙げているところから、当時の同氏の天理教に対する関心のほどがうかがわれるのである。

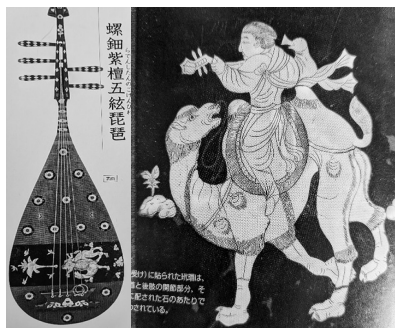
文物が語る音の世界—五絃琵琶—

五絃琵琶

正倉院展には楽器も展示される。展示されれば一番の目玉は五絃琵琶であろう。シルクロードを通じて日本にもたらされた正倉院の御物を象徴する逸品である。林謙三『東アジア楽器考』（カワイ楽譜、1973年、364頁）には、その起源を次のようにいう。

五絃琵琶は、五絃を有する琵琶で、イラン系の四絃琵琶と共に、はるか遠い古代の西アジア地方において、同一源から発した楽器と思われるが、おのおのの分化発展の径路を異にし、結局外形的にも演奏的にも、この二種の系統の琵琶の間に明確な区別点が幾箇か存するのである。即ち四絃琵琶は西アジア、特にイラン地方に生長完成したのに対して、五絃はインド地方に發育大成したもので、このような發育地の相違はやがて、…形態的にもおのおの独自のものを生ずるに至った。

その五絃琵琶について、ここで、『正倉院美術館』（講談社、2009年、136・137頁）によって写真をあげてみたい。



五絃は直頸であり、撥があたる部分には、左の写真にみえるラクダに乗った人物が四絃の曲頸琵琶を奏でている螺鈿細工が施されている。世界にもこれしか残されていない五絃琵琶はどのような音色だったのか。林謙三氏は陽明文庫所蔵の『五絃譜』の解説を試みられた（『雅楽—古楽譜の解説』音楽之友社、1969年）。この五絃の楽譜には、6つの調子と21曲の楽譜が記されていて、渡部信一郎氏によると、そこにみえる「承和九年（842）三月十一日上之」という記述が、日本宮廷に上程された年代ということである（『中国古代の楽制と国家』文理閣、2013年、341頁）。実はこのほとんど同時期に、五絃琵琶の音色を詠じた白居易（772～846）の詩も日本に伝えられた。

白居易「五絃弾」

五絃弾五絃弾	五絃を弾じ 五絃を弾ず
聴者傾耳心寥寥	聴く者 耳を傾け心寥寥
趙壁知君入骨愛	趙壁は君が骨に入りて愛するを知り
五絃一一為君調	五絃一一君が ^{ため} 為に調う

始まりは、五絃の音色に心を奪われている人々が自分の演奏に心底ほれ込んでいることを知る楽人趙壁が、念入りに調弦をしているさまが描かれる。

第一第二絃索索	第一第二の絃は索索
秋風拂松疎韻落	秋風 松を拂うて疎韻落つ
第三第四絃冷冷	第三第四の絃は冷冷
夜鶴憶子籠中鳴	夜鶴 子を憶うて籠中に鳴く
第五絃声最掩抑	第五の絃声 最も掩抑す
隴水凍咽流不得	隴水凍咽して流れ得ず

第1第2の絃の音「索索」は、かさかさとした音で、心の安らかでないさまをも表わしている。秋風に吹かれる松の枝がたてる音を想像すると、なにか心寂しくなる。第3第4の絃の音「冷冷」は、清らかだが冷たいイメージがある音で、籠に閉じ込められ夜に子を案じて鳴く鶴を思わせる。なんと悲痛なことか。さらに第5の絃は最も抑鬱的であり、隴山（陝西省と甘肅省の境にある山）の川が凍ってしまっ流れずに咽ぶようだという。こうした音のする五絃琵琶に聴きほれていると大変な

ことになる。白居易作品の意図は、五絃の演奏を褒めるところではなく、それに酔いしれる人々に警鐘を鳴らすことであつた。

五絃並奏君試聴	五絃並びに奏す 君試みに聴け
淒淒切切復鍾錚	淒淒切切復た鍾錚
鉄撃珊瑚一両曲	鉄は珊瑚を撃つ 一両曲
氷写玉盤千万声	氷は玉盤に写す 千万声
鉄声殺 氷声寒	鉄声は殺 氷声は寒
殺声入耳膚血慘	殺声 耳に入りて 膚血惨に
寒氣中人肌骨酸	寒氣 人に ^{あた} りて 肌骨酸なり

さらに5本の絃をすべてつかっての演奏を聴くと、寒く冷やか、さびしくいたましい形容をする「淒淒」、音声のひしひしと迫るさまを表わす「切切」、そして金属性のかたい音の響きを示す「鍾錚」、どれも心穏やかにはならないものである。そして、鉄で珊瑚を打ち砕くような曲を1つ、2つ、氷を玉の器に載せる音が千万声と続くのだ。鉄声は「殺」、氷声は「寒」、どちらも決して快いものではなく、「殺声」が耳から入れば皮膚や血脈がいたむし、「寒氣」が人にあたると骨も肉もつらい感じがする。

この詩には、「鄭の雅を奪うを惡むなり」との主題が最初に示されていた。和やかな音色で心に平和をもたらす二十五絃の瑟（雅声）が廃れて、人のところを「殺」「寒」で満たす五絃琵琶（鄭声）が流行する世相を諷刺することにその主眼があつたのである。まさに五絃琵琶崇拜への明快な忠告とも受け取れよう。

五絃琵琶と中国

この五絃琵琶はいつごろから中国で用いられたのか。本学におられた山本忠尚氏によると、北魏太和八年（484）に埋葬された山西省大同市司馬金龍墓の石牀に浅浮彫で表現された伎楽飛天が手弾しているのが最古の例だそう（『日中美術考古学研究』吉川弘文館、2008年、271頁）。五絃琵琶は、北魏の特に漢化政策で知られる孝文帝（471～499在位）の時期に用いられるようになった。宮廷儀礼に用いられる音楽についても、北魏前期は西涼系の音楽の影響が強かったが、孝文帝の改革で、中華の宮廷音楽への転換が模索されていたという（窪添慶文『北魏史』東方書店、2022年、35頁）。異国を象徴するように考えられてきた五絃琵琶も、次第に中華の宮廷音楽へと組み入れられていった。その後『隋書』『音楽志』では、西涼楽・龜茲楽・天竺楽・疏勒楽・安国楽・高麗楽といった外来音楽を宮廷で披露する際に用いられた。ただ、同じように琵琶・笙・笛なども外来音楽を奏でているので、五絃琵琶だけが必ずしも、外来楽器として特別扱いされていたわけではないようだ。それは、先に挙げた日本に伝わる五絃琵琶の楽譜『五絃譜』にみえる曲目に、王昭君や六胡州など辺塞を思わせる曲目だけではなく、聖明楽・秦王破陣楽・天長久など唐代宮廷音楽の中でも皇帝の御代を寿ぐ曲目も含まれていることから明らかであろう。

五絃琵琶が廃れた理由

こうして唐の宮廷で演奏もされ、先に引いた白居易「五絃弾」では、その演奏が長安の人々を魅了したことが克明に記され、日本にも楽譜とともに将来された五絃琵琶がなぜ廃れたのか。村越貴代美氏に「なぜ正倉院宝物『螺鈿紫檀五絃琵琶』に描かれている駱駝に乗っている胡人は四絃琵琶を弾いているのか」（『慶応義塾大学日吉紀要』No.35 2020年）という興味深い論稿がある。その結論は、当時「琵琶」といえば四絃だったからというシンプルなものであるが、五絃は不要となった理由もそこにあるのかもしれない。ただ、白居易の詩が中国と日本で盛んに読まれたことを考えると、「五絃弾」詩が何か影響したと思わずにはいられない。

ブラジルの宗教と移民③

おやさと研究所講師
中西 光一 Mitsukazu Nakanishi

ブラジル移住に向けて

南北戦争の終結とともに、アメリカ南部連合は崩壊し、南部の人々は混乱と困難に直面していた。特に、黒人奴隷制の廃止と黒人の基本的権利を保障した「再建期修正条項（Reconstruction Amendments）」の成立は、白人至上主義社会の終焉を意味し、南部の白人たちの怒りを買った。そのため、彼らの一部は外国に新天地を求めた。その行き先はカナダ、イギリス、ジャマイカ、キューバ、メキシコ、ブラジル、日本、エジプト、ベネズエラ、ペリズ、フィジー、太平洋諸島など多岐にわたったが、とりわけ人気があったのはブラジルとキューバであった。なぜなら、両国では奴隷制の上に社会・経済活動が成立しており、白人種を国家の頂点に位置づけた人種的なヒエラルキーが確立されていたからである。

実のところ、当時のブラジルは、南北戦争において国際法上中立の立場を保ちながらも、フロリダ号、ジョージア号、アラバマ号といった南部連合海軍の戦艦が同国のバイーア州やペルナンブコ州に停泊することを許可していた。その理由は、ブラジルが南北戦争を注視し、そこに自国の奴隷制の運命を重ねていたからである。ブラジルにとって、北軍の勝利は自国の奴隷制に対する危機を意味し、逆に南軍の勝利はその存続を意味していた。それゆえ、ブラジルは南軍の勝利を後押しする目的で、戦艦の受け入れを秘密裏に行っていたのである。さらに、戦後のブラジルは南部白人を積極的に受け入れ、移住を円滑に進めるため、次の支援を行った。まず、渡航費を支援し、植民地開拓に必要な農耕用具などの輸入税を免除した。次に、リオデジャネイロ港に到着後、移民が約20日間、移民宿泊施設に滞在することを許可し、最後に、リオデジャネイロから植民地への移動費も支援した。

南部移民協会の創設

ブラジル政府の支援に加えて、1865年の後半に創設された南部移民協会（Southern Immigration Society）も移民活動において重要な役割を果たした。同協会は、南部諸州に事務所を設置し、ブラジルの地理的環境、気候、土壌、生態系などの自然的条件や、ブラジルの社会文化的性格を調査するために調査員を派遣した。調査員たちは、移住が円滑に進むよう、調査結果をガイドブックや新聞、書籍などに記し、それらは移住を促進する材料となった。なお、1865年から1866年にかけて、8人の調査員がブラジルに派遣され、彼らの活動が功を奏した結果、南部では「ブラジル・フィーバー（Brazil Fever）」が起り、2,000人から4,000人の南部人がブラジルに移住したといわれている。

折しも、南部移民協会の活動に呼応して、ブラジル政府は1865年8月にニューヨーク市内で調査員の報告を統括するための事務所を設立した。この事務所はブラジル人ジャーナリストのクインティーノ・ボカイウ・ヴァの管理下に置かれ、彼は移住促進のために『ザ・ブラジル・エミグレーション・リポーター（The Brazil Emigration Reporter）』という新聞を創刊し、調査員の報告を積極的にアメリカ社会に発信した。

また、渡航に不可欠であった蒸気船の手配には、ジェームス・フレッチャーという人物が重要な役割を果たした。彼はニューヨークとリオデジャネイロ間の定期航路網の開設と、1865年に設立されたユナイテッド・ステーツ・アンド・ブラジル・スチームシップ・カンパニー（United States and Brazil Steamship Company）に貢献した。同社の船は年間12回往復し、移民の送り出しと同時に郵便物などの輸送も行っていた。なお、ブラジルへの航路はニューヨーク港を出発し、セント・トーマス島（カリブ海）、ブラジルのパラ州、ペルナンブコ州、バイーア州の順に経由して、リオデジャネイロ港に到着するものであった。こうして、さまざまな準備段階を経て、ブラジル移住への舵は切られたのである。

植民地の形成

次に、南部人の植民地について見ていこう。実際、移民活動の興隆を受けて、ブラジルでは1865年から1867年にかけて、主に7つの植民地が形成された。

まず、1865年にアラバマ州出身のウィリアム・ハッチンソン・ノリスとその息子ロバートらがサンパウロ州のサンタバーバラ・ド・オエステにノリス植民地を築いた。続いて、ルイジアナ州出身のバラード・ダンらがサンパウロ州南部のヴァーレ・ド・リベイラ地方でリジーランド植民地を形成した。同様に、1866年には同地方にテキサス州出身のフランク・マクマランによるジュキア植民地とジェームス・ガストンによるシリリッカ植民地も築かれた。その他、ルイジアナ州出身のホレス・レインと旧南部連合軍のスウェイン大佐によるパラナグアー植民地、アラバマ州出身のチャールズ・ガンターによるジュパラナン植民地、オハイオ州出身のランスフォード・ヘースティングズによるサンタレーン植民地も存在した。

南部人の植民地活動はブラジルの各地で展開されたが、その形成過程は千差万別であった。上記の植民地の中でも特にノリス植民地は繁栄し、同地の南部人は農業活動とプロテスタント伝道を通じて、南部産の綿花やジョージア州産のスイカ、クルミの栽培、灯油ランプや鋤の普及、アメリカナ市の創設、プロテスタント教会やアメリカンスクールの設立など、ブラジル社会に多方面で貢献した。これは通説となっており、研究者の間ではノリス植民地を顕彰する論考がほとんどを占めているため、同地を重要視する傾向が強い。ただし、このような姿勢は他の植民地を不可視化あるいは周縁化する結果を招いており、南北戦争という「負の記憶」を南部人の共通性として認識しつつ、彼らの植民地経験の全体像を明らかにすることが、筆者の研究の課題となっている。

[参考文献]

- Clicea Maria Augusto de Miranda. *Repercussões da Guerra Civil Americana no destino da escravidão no Brasil - 1861-1888. Tese (Doutorado em História Social)* - Faculdade de Filosofia Letras e Ciências Humanas, Universidade de São Paulo, São Paulo, 2017.
- Frank P. Goldman. *Os Pioneiros Americanos no Brasil: Educadores, Sacerdotes, Covos, e Reis*. Tradução pela Olivia Krahenbuhl. São Paulo: Livraria Pioneira Editora, 1972.

第5講：85「子供には重荷」

「おつかれー」今どきの若者は「おはよう」や「こんにちは」よりこの言葉が日常のあいさつになっているようだ。学生が先生に対しても、「お疲れ様です」という表現から会話を始めることも多い。以前、教会本部で参拝をし終えて靴を履く際にも、境内係の人から「お疲れ様でした」と声をかけられた。一瞬「？」と思った。「お疲れ？」「何で？」こちらは神殿で参拝を終え、むしろ元気をいただいている。しかも真冬や灼熱の時期でもなく、気候の良い季節。神殿内の風が心地よく、座りづとめをする私を疲れさせる要素は何もなかった。「別に疲れてないけどなあ。」ふとそんな思いで神殿を後にした。

この「お疲れ様」と同じように「ご苦労様」と言う表現もある。どちらも相手を「ねぎらう」表現だが、相手によって言い方を変える必要があるようだ。「お疲れ様」は誰に対しても使える表現だが、「ご苦労様」は上の立場から下の者に対して使う表現だと言われている。同じことを言うにしても、年齢や立場などによって異なってくるのは日本語の特徴でもある。尊敬語や謙譲語、丁寧語など状況によって表現を変える必要がある。また、小さな男の子に年齢を聞くと「ボクいくつ？」と言ったりもする。相手の立場にたった第1人称の使い方である。日本語は相手の立場を慮^{おもんばか}って使う表現が実に豊かである。

教祖は誰に対しても丁寧に接せられたという。「教祖は、大人だけでなく、いつ、どこの子供にでも、このように丁寧に仰せになった」（逸話 121「いとに着物を」）とある。逸話 85「子供には重荷」では、当時8歳の忠作に「よう、帰って来たなあ。子供には重荷やなあ。」と声をかけ、3升の鏡餅を背負った労をねぎらわれている。相手を慮^{おもんばか}つてのお言葉である。そしてその表現には、これから忠作が背負うであろうさまざまな「重荷」を見越した上での「ねぎらい」の言葉だったのかもしれない。

実際、忠作はさまざまな「重荷」を背負うことになる。

最初の「重荷」は、教祖 30 年祭の本部神殿（現在の北礼拝場）のふしんに関してである。当時、おぢばには全国から巨木が送られてきたが、それを製材する設備がなかった。そこで忠作に、それらの用材を加工する機械をお供えしてもらいたいという話が持ち込まれた。勉強好きだった忠作は元来いろんな発明をしてきたようだが、このときも忠作の弟が経営する鉄工所の工員たちと話し合い、当時としては最新鋭の製材機一式を製造し、本部に献上した。

2つ目の「重荷」は、この製材機の献納が終わって間もなくのこと。これも本部のふしんに関わるもので、要所を締めるかすがいやボルトなど建築に使用される金物を用意してもらいたいというものだった。本来これらは鉄工所で製作するようなものではなかったが、工場と関わっていた企業から買い付けることによっておぢばに献納した。

3つ目の「重荷」は、同じく教祖 30 年祭のふしんの仕上

げとして、本部神殿用の天水桶だった。初代真柱から「用水」の2文字をいただき、鉄工所の協力を得て2基を制作し献納した。

忠作が背負ったこれらの大きな「重荷」以外にも、3日という期日が決められたなかでの上級教会への御用金の準備や、教祖四十年祭の教会倍加運動の時には3日で教会を5カ所設立するということもあった。

これらは、忠作自身が教祖からいただいた「子供には重荷やなあ。」という言葉が素直に受け取り、実行に移したものである。そして言うまでもなく、当事者にとっては決して本来の意味での「重荷」ではなかった。むしろこれらの「重荷」を、親の思いや期待に応える、あるいは応えられる機会、言い換えれば感謝を具現化する好機ととらえ喜び勇んで取り組んできた結果でもある。1つ目の「重荷」をなしたときのことを忠作は「こんな結構な重荷を頂いたのは初めてや。子供の頃、母と教祖にお目にかかった時、『子供には重荷やなあ』と仰せられたが、その1つがこれではないかという気がする」と述懐したという。忠作には最初に教祖と出会ったときにいただいたこのお言葉が、生涯にわたってずっと心に響いていたのに違いない。

大正 12 年（1923）、大阪を拠点とした明城布教所は分教会に昇格し、忠作は初代会長となったが、昭和 4 年（1929）4 月には「荒道開拓」を志し、東京での布教に出発した。忠作 56 歳のことだった。それは「生涯一布教師」の実践であり、教祖からいただいたさらなる「重荷」の実行でもあった。

東京に行った忠作に生活の基盤があったわけではない。「最低限の生活の保障がなければ、勇んで布教はできない。」極貧の幼少時代を過ごした忠作はそう考えていた。そこで生きていくための経済的基盤として、日中は駄菓子屋の卸売りをした。「働いているから布教することはできない」ということも「布教しているから働くことはできない」ということも否定していた。したがって東京では、昼間は商売で精を出し、布教活動は夜に行った。やがて駄菓子屋も布教も軌道に乗り、5年後には分教会の設立にまで至っている。それはまさに、世間のなかで生活を営みつつ布教するこの道の「修行」者たる「里の仙人」という姿であった。

「子供には重荷やなあ。」小さいころにいただいた親からの一言のねぎらいの言葉が、これほどまでに心に響き、苦労を通る原動力になるのだと実感させられる逸話である。参拝をし終えた私に「お疲れ様です」とかけられた境内係の言葉は、これから背負うであろう「重荷」を見越しての親の声だったのかもしれない。否、むしろ逆に、「丈夫な身体にも拘らず、至って惰け者で、他の人がどのように忙しくして居ても、一向に働こうとはせず」にいた作男に対して教祖がかけられた「ご苦労さん。」のように、怠惰な私を見抜いての言葉だったのかもしれない。

第 373 回研究報告会（2024 年 12 月 20 日）

「明治初期の京都の様相—高野友治先生の見解の検討—」

遠藤 正彦（天理教校）

本報告では、天理教伝道史の碩学である高野友治先生の見解を足がかりに、明治初期の京都の様相を提示しようとした。当時の京都は官憲の干渉が少ないとされているが、高野先生は、その要因として府政に影響をもつ元会津藩士、東五一あずまごいちの人脈、及び京都における「心学」の受容を挙げている。今回は、東五一の略歴を提示するとともに、当時の京都府知事（横村正直、北垣国道）の「心学」、「宗教」に対する理解が伺える資料を提示した。東五一が明治 20 年前後、知事に非常に近い立場にいたことは確認できたが、斯道会についての理解や具体的な提言を見いだすことは出来なかった。また、両知事が「心学」について理解を示していたことは垣間見えるが、お道の教えや斯道会をどのような枠組みでとらえていたのかという点までは踏み込めなかった。質疑応答では、多方面からの一次史料の必要性を指摘されたが、それらへのアプローチを通して当時の様相を明確化することにつなげていきたい。

2024 年度公開教学講座のご案内

— 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（10） —

2024 年度の公開教学講座は、以下の日程でオンライン配信しています。

第 1 回 6 月 井上昭洋所長 172 話「前生のさんげ」

第 2 回 7 月 澤井真研究員 114 話「よう苦労して来た」

第 3 回 9 月 岡田正彦研究員 135 話「皆丸い心で」

第 4 回 10 月 八木三郎研究員 36 話「定めた心」

第 5 回 11 月 森洋明研究員 85 話「子供には重荷」

第 6 回 1 月 中西光一研究員 144 話「天に届く理」

2024 年度おやさと研究所 特別講座「教学と現代」

『天理教台湾伝道史』刊行記念 台湾伝道を振り返る

天理教の台湾伝道は 1896 年（明治 29）、古谷マツ姉の渡台から始まり、翌年には「おさしづ」を仰いで、山名分教会（当時）により海外初の教会である台中教会が設置されました。その後 1934 年（昭和 9）には台北市内に台湾伝道庁が設置され、昨年 2024 年（令和 6）11 月には創立 90 周年記念祭を行いました。

おやさと研究所ではこの度、『天理教台湾伝道史』の刊行を記念して、『天理教台湾伝道史』刊行記念台湾伝道を振り返るを開催します。台湾伝道に関わる皆様、また広く海外伝道に関心をお持ちの皆様にはご参集を頂けましたら幸いです。※事前申し込みは不要です。直接会場にお越しください。

日時：2025 年 3 月 27 日（木） 14:00~16:20

会場：天理大学研究棟 3 階第一会議室

プログラム

14:00-14:05	開催挨拶	井上昭洋 所長
14:05-14:15	①伝道史の編集の経緯	金子昭 研究員
14:15-14:30	②戦前の台湾伝道史	山西弘朗 香川大学
14:30-14:45	③戦後の台湾伝道史	高佳芳 元海外部員
14:45-15:00	④天理教婦人会の伝道	堀内みどり 主任
15:00-15:15	⑤台湾伝道史の一齣	中西牛郎と高見庄蔵 佐藤浩司 元研究員
15:15-15:25	休憩（10 分）	
15:25-16:10	質疑応答	全員
16:10-16:20	総括と挨拶	三濱善朗 本部員
16:20	閉会	

〔共催〕天理総合人間学研究室、天理ジェンダー・女性学研究室、伝道史料室（第 9 回伝道フォーラム）

2025
年度

おやさと研究所公開教学講座

「元の理」の学術的研究と
その新しい展開を求めて

【開催趣旨】

2025年に天理大学は創立100周年を迎え、また2026年には天理教が教祖140年祭を迎えます。この記念すべき旬に、おやさと研究所では「元の理」をテーマに公開教学講座を開催いたします。

「元の理」が持つ救済の真理を掘り下げ、現代人の心に届くように論じることが、教内の人々を“たすけ”へと勇ませ、また教えの普遍的な“ひろめ”に寄与することです。

今回、各研究員はそれぞれの専門分野を踏まえつつ、また自らの学問領域を越境して、「元の理」について研究を深め、その成果を広く学内外・教内外に問うことになりました。2025年4月から2026年3月まで全12回のシリーズとして行い、第12回は2025年度の「教学と現代」として開催いたします。

開催内容

【日時】 毎月25日 13:00～15:00

【会場】 天理大学研究棟3階 第1会議室（予定）

※但し、第10回（1月）はふるさと会館大ホール

回	日程	テーマ	担当者
第1回	04月25日（金）	「元の理」研究入門	金子昭 研究員
第2回	05月25日（日）	「元の理」の人種理論・平等思想	中西光一 研究員
第3回	06月25日（水）	「元の理」の社会思想	澤井治郎 研究員
第4回	07月25日（金）	「元の理」の見立て・象徴論	澤井真 研究員
第5回	08月25日（月）	「元の理」と福祉思想	八木三郎 元研究員
第6回	09月25日（木）	「元の理」と布教伝道	尾上貴行 研究員
第7回	10月25日（土）	「元の理」と天理教学	島田勝巳 研究員
第8回	11月25日（火）	「元の理」と「こふき」	岡田正彦 研究員
第9回	12月25日（木）	「元の理」と異文化理解	森洋明 研究員
第10回	01月25日（日）	「元の理」の人間学／人類学	井上昭洋 所長
第11回	02月25日（水）	「元の理」のジェンダー論	堀内みどり 主任
第12回 （教学と現代）	03月25日（水）	「元の理」の学際的研究の可能性	佐藤孝則 元研究員、他

※事前申し込みは不要です。直接会場にお越しください。

グローバル天理

第26巻 第2号（通巻302号）

2025年（令和7年）2月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所（HP）



印刷 天理時報社

Printed in Japan